

【キーワード】

〔施設種別〕 高齢者施設 障がい者施設 子ども施設 住宅 宿泊施設 コミュニティ施設
 〔運営主体〕 市区町村 法人 NPO 個人 補助金 内閣府 国土交通省 厚生労働省 都道府県
 〔建物形式〕 1棟単体型 複数棟集合型 団地型 建物状況 新築 増築 改修 一部改修 既存
 〔対象者〕 高齢者 障がい者 子ども ファミリー 多世代



写真 1. 外観写真

木曾平沢の雁行した木造建築が並ぶまちなみのほぼ中心地にあり、1931年に避暑地の別荘として建てられた和洋折衷の特徴的な建物を、地域のコミュニティ拠点と「泊まれるまちづくりの場所」として再生した。外観の右側白壁の洋風建築と左側黒壁の和風建築のコントラストの美しさは街並みの中でも異彩を放ち、内外共に和風建築と洋風建築の両方が楽しめる。1階はカフェやバーとしての運用も予定され、地域活性の起点になる拠点である。

■施設概要

所在地：〒399-6302 長野県塩尻市木曾平沢 1587

施設種別：多機能型コミュニティ施設

運営主体：株式会社しおじり街元気カンパニー

*所有者より、建物は塩尻市振興公社が購入し所有、土地は同市の土地開発公社が購入し所有しており、株式会社しおじり街元気カンパニーは賃貸契約を結んでいる。

設計：upsetters architects

敷地面積：873.69㎡（登記上）

延床面積：191.06㎡（登記上）

構造・階数：木造 2 階建

運営開始：2021年2月1日（宿泊などの受付開始日）

スタッフ：「家守」と呼ばれる管理人1名。現在は「家守」

が宿泊受付・対応や準備などを行っている。

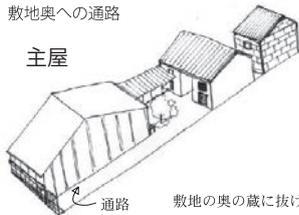


写真 2. 立地周辺 googlemap より

旧中山道、木曾平沢の旧街道沿いに立地する。地図赤枠部分が日々別荘。旧街道沿いには漆器商店が並び、建物は街道に沿い、雁行して街並みを形成している。

敷地奥への通路

主屋



敷地の奥の蔵に抜けるための通路又はドジ（通り土間）が通りの東西どちら側の家も南側にある。

代表的な町家一階平面図



塩尻市HP: <https://www.city.shiojiri.lg.jp/tanoshimu/bunkazai/kisohirasawa.html>

図 1. 木曾平沢の建築の概要（木曾平沢町並み建築てくてくマップ、塩尻市ホームページより）

主屋は表からミセ・オカッテ・ザシキを並べる基本平面をとる。敷地の奥に抜けるための通路、またはドジと呼ばれる通り土間が街道の東西どちら側の家も南側にある。

インタビューでお話を伺った方：

- ・藤森茂樹氏(株式会社おしじり街元気カンパニー、代表取締役社長, 移住定住担当(空き家コーディネーター), まちづくり担当)
- ・古畑久哉氏(塩尻市役所, 企画政策部次長, 地方創生推進課長, 官民連携推進室長)
- ・近藤沙紀氏(塩尻市地域おこし協力隊, 木曾平沢「日々別荘」家守)

訪問者：山田あすか, 村川真紀

訪問日：2021年3月26日 10:00～12:00

1. 漆工町 木曾平沢

以下は、近藤氏からご提供いただいた「木曾平沢 手塚家別荘 多機能型コミュニティ施設改修・運営事業 事業計画(案)」並びに参考文献^{1~4)}をもとに整理した。

1) まちの成り立ち

木曾平沢は塩尻市の南部にあり、木曾谷を通る

中山道の北の入口に位置し、標高900mの高地に立地している。近世では、奈良井宿の在郷として位置づけられ、檜物細工や漆器の生産によって、明治初期から産業としての基盤が確立し、漆工町として発展した。現在でも漆器の技術革新などによって、日本有数の漆器産地として有名である。

まち並みは、中山道沿いには店舗をはじめ塗藏などの作業場や職人の住まいなど、漆器業にまつわる建物が建ち並んでいる(写真4)。また、木曾平沢を通る中山道は部分的に湾曲しており、自然と建物が雁行しているため、建物側面が連続して見える景観は特徴的である(写真3)(→事例1502)。

これらの歴史的景観、漆工という伝統工芸の職人町としての歴史的資産を有するまち並みについて、住民と行政が協働してまちづくりを積極的に進めた結果、2006年に「重要伝統的建造物群保存地区(重伝建)」の選定を受けた。これは漆工町としては国内初で唯一の登録である。



写真3. 木曾平沢の町並み

街道沿いに並ぶ主屋は街路との間に若干の空地(アガモチ)を取って配置される。湾曲している街路の接面と垂直に敷地や主屋を配さないため、独特の雁行した町並みが形成される。

2) まちとしての課題

一方で、時代の変遷とともに、生活者のライフスタイル変化や価値観、市場の変化による漆器需要の減少により漆器産業は衰退していった。これに伴う漆関連の職人の数の減少、また将来的に経済的な見通しが立ちにくいことなどを主要要因として、職人の子息の地域外への進学・就職による転居などによる後継者の途絶があった。全国的な高齢化・少子化も影響し、地区の人口は減少の一途をたどっていった。

このような、産業衰退に伴う人口減少と高齢化による高い空き家率とともに、地域コミュニティの持続可能性なども課題であった。

3) まちの将来の可能性

これらの課題を解消するための、まちづくりやまちおこしの起点となり得る人々について、限定的ではありながらも存在している、地域に現存する職人やその技術に惹かれ地域に通う若い職人の卵や漆器や工芸に関わらず自らが生活する家屋や食物を含めて「自分の手でつくること」自体に関心を持ち、地域に関わりを持とうとしている若い世代などに着目した。

4) 事業当初に構想していた課題解決に向けた方向性

当初は、地域を訪れるこれらの人々に対し、必要な環境や仕組みを整備していくこと、つまり「そこに暮らし、先人に技術を学び、多様なものづくりを志す者同士が刺激・協働し合える環境を通じ、社会に価値ある商品（作品）を生み出すことで生業とし、家庭を持ち、安心して子どもを育てることが出来る地域をつくること」を課題解決に向けた方向性として定めていた。

特徴的なのは、漆器分野にとどまらない木工やガラスなどの幅広い「ものづくり」を志す人々に門戸を開き、選ばれる地域にしていく点である。この視点は木曾漆器工業協同組合青年部によって策定された地域ビジョンでも触れられており、漆器産業の当事者からも同様の意見が出されている。

この構想を起点に、住民へのアンケートやヒアリング、ワークショップなどを重ねた結果、第一弾の事業として始まったのが当時空き家であった手塚家別荘を宿泊機能付き多機能型コミュニティ施設として活用する「日々別荘」である。



写真4. 木曾平沢の漆工町としての特徴

赤が主屋（表からミセ・オカッテ・ザシキを並べる基本平面をとる）、黄色が塗蔵（漆器の作業場所）、青色が付属屋であり、街道沿いに多くの漆器店が並び、街道を一步入ると奥には多くの塗蔵が密集している様子がわかる。

2. 手塚家別荘

1) 建物について

日々別荘は、木曾平沢エリアのほぼ中心に位置する「手塚家別荘」が活用されている（図1）。手塚家別荘は、愛知県名古屋市で漆器店を営んでいた手塚有三氏（1895-1966）により、1931年に夏場の避暑地として妻の実家の隣に別荘として建築された、築90年（2021年現在）の木造2階建ての建物である。

建物は正面から見て左側が和風、右側が洋風の建築であり、和風部分の外壁は黒、洋風部分の外壁は白とコントラストの効いた外観である。内装も、洋風部分1階は板張りのログハウス風の設えや白壁で、特に幾何学模様の瀟洒な窓枠に色ガラスや細工の施されたガラスがはめ込まれた窓は特徴的である。また、和風部分は1階、2階にそれ

ぞれ書院を持つほか、枯山水の庭などがある。

建築当時は、有三氏の妻芳子氏により和歌・茶道・華道・譜の教室が開かれ、和洋折衷の特徴的な建物と共に地域住民に特別な場所として広く親しまれていた。このようにもとより地域のコミュニティ拠点としてのポテンシャルを持つ建物であった。

2) 建物が保存されてきた経緯

戦中は手塚家の疎開先としても利用され、ご子息が住まれた時期もあったという。しかし、有三氏の他界後、40年近く空き家の状態が続き老朽化が進んだため、2003年頃、所有者（有三氏の孫兄弟）は建物の取り壊しを考えていたが、木曾平沢町並み保存推進委員会をはじめとする多くの地域住民の歎願と保存に対する熱意に打たれ、所有者の自費により、一部新築・増築を含めた改修および修復が行われた。

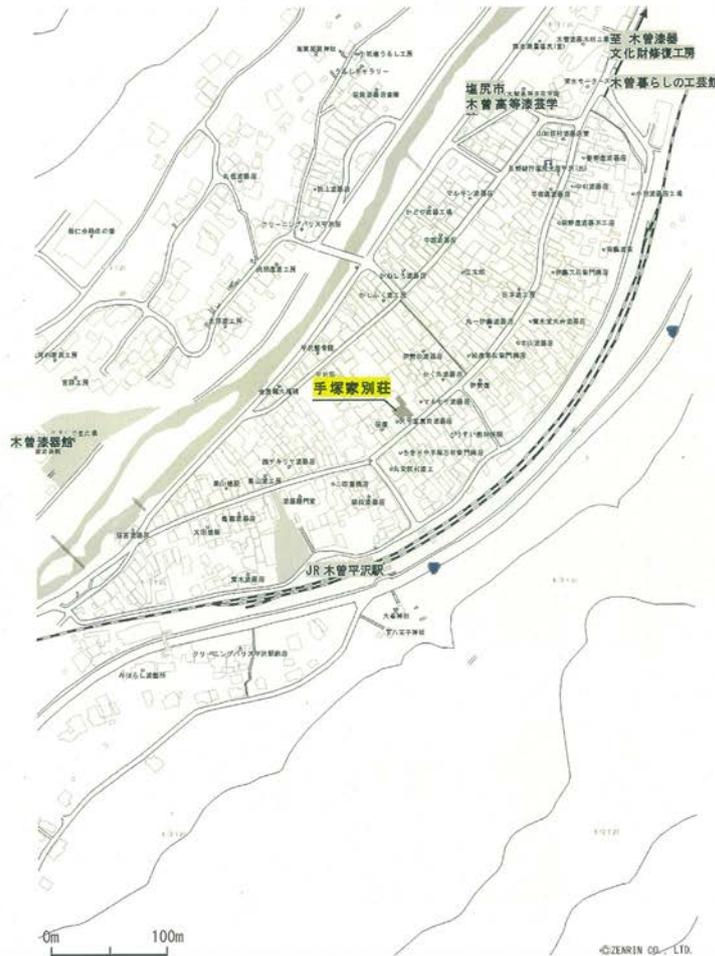


図1. 手塚家別荘立地（近藤氏提供資料より）

木曾平沢の中山道沿い、ほぼ中心地に立地している。

所有者（手塚氏）側の「なんらかの形で地域の人たちに活用してもらえれば」という想いがあり修復されたが、修復時期と、檜川村と塩尻市との合併の動き（2005年に合併）の時期が重なったため、地域の中での手塚家別荘を活用する動きは2018年頃まで止まっていた。

3. 活用活動の再開

以下はインタビューでの記録および参考文献^{5, 7, 8, 12, 14}などをもとに整理した。

1) 木曾平沢の空き家問題と日々別荘の関係者

藤森氏は2016年に塩尻市職員を退職後、空き家対策に携わっていた。また、株式会社しおじり街元気カンパニー⁶（街カン）の代表取締役社長である。街カンは中心市街地活性化事業の一環で2010年に創立した株式会社で、資本は市が2割、商工会議所が1割、残りが民間の出資である。また、若手の役員として商店の社長などが参与している。若手役員の意見を取り入れ、まちづくりの会社として中心市街地だけではなく広域を対象に活動している。

古畑氏は藤森氏の後輩にあたり、藤森氏と活動を共にしてきた経緯がある。近藤氏は2021年現在、塩尻市の地域おこし協力隊に所属し、木曾平沢に出向、日々別荘の管理者および日々別荘を中心としたまちおこし担当として活動している。木曾平沢地区の地域おこし協力隊は前任者として立川あゆ氏が先んじて活動を行っていた。

2) 木曾平沢地区で始めた理由

2014年頃から、空き家バンクなどの制度はあるものの積極的な活用が進まず、空き家の増加や実態の把握が課題となっていた背景がある。これを受けて、2016年に藤森氏が空き家コーディネーターに就任し、同年に実施された空き家の実態調査と共に地域住民に実施したアンケート調査をもとに、各地域を視察していた。その中で、木曾平沢地区は、重伝建に指定され建物の補修や取り壊しなどが難しい点や、産業衰退の状況、人口減少

と高い高齢化率などの観点から、重伝建としてのまちの保存の重要性がありながらも、最も問題解決が難しい地域であると考え、2017年より木曾平沢地区に入り、空き家の解消および地域活性化活動を始めた。

3) 藤森氏が手塚家別荘を担当した経緯

本格的に活動を開始した当初（2018年）に着手した物件は、2021年現在は立川氏が携わる「木曾平沢ふるもの市⁷」会場として活用する、旧洋品店「わじまや」であった（写真5）。老朽化が著しく、改修や活用にあたり藤森氏だけでの活動では限界があり、木曾平沢地区の住民へのヒアリングや課題整理を「シブヤ大学⁸」に依頼した。

「シブヤ大学」とはまちのあらゆる場所を教室に、

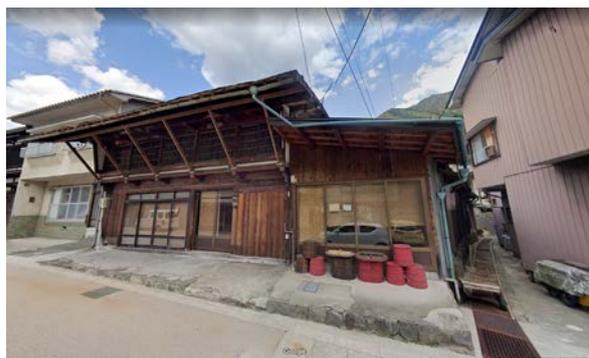


写真5. 木曾平沢ふるもの市（旧洋品店「わじまや」）写真上はgooglemapより

ボランティアスタッフ主体の学びの場をつくり、多様な授業を開催している NPO 法人である。以前からの関わりがあったことに加えて、2017年に木曾平沢地区で同大学と繋がりのある市職員の山田崇氏（塩尻市役所 企画政策部 官民連携推進課 課長補佐（2021.4 時点）／nanoda 代表／信州移住計画 代表⁹⁾）がイベントを実施した経緯もあり、依頼に至った。

2018年にシブヤ大学より左京泰明氏が参画し、前述の地域住民へのヒアリングや課題整理を行っていた。同年、藤森氏が立川氏と共に木曾平沢地区の空き家関連の活動で地域内を歩いており、手塚家別荘前を通りがかったところ、別荘の保守管理に訪れていた所有者の手塚氏から声をかけられ、藤森氏が空き家コーディネーターを担っていたこともあり、手塚氏より依頼を受けて手塚家別荘の活用担当となった。

このように、木曾平沢のまちづくりのあり方を地域住民を主体として進める活動と共に空き家の活用が進められる中で、手塚家別荘の活用に関する活動が改めてスタートした。

4) 手塚家別荘の活用について

手塚氏は藤森氏に声をかけた当時（2018年）、80代に差し掛かっており、横浜に在住しながら別荘の保守管理のために機材を積んだ車で行き来を行っていた。自身の年齢もあり、今後の保守管理の継続に不安を抱えていたため、売却を考えていた。一方で藤森氏は地域の拠点であった経緯も持つ手塚家別荘を、当初より民間へ売却するのではなく、再度地域の拠点としての整備・活用を行いたいと考えていた。

1年半ほど、地域住民へのヒアリングや課題整理を丁寧に行った結果、まちの活性化に役立つ施設として、多機能型コミュニティ施設として整備することを決めた。

最終的に、手塚氏の承諾を得て、藤森さんが塩尻市に掛け合い、所有者である手塚氏より、建物は塩尻市振興公社¹⁰⁾（空き家対策の母体組織）が

購入し、土地は塩尻市土地開発公社¹¹⁾が購入した。街カンは、振興公社と土地開発公社と賃貸契約を結び、建物・機材使用料と家賃を支払う形態で運営を行っている。



写真6. 洋風建築側の外観



写真7. 和風建築側の外観



写真8. 1階洋室部分

一般に解放され、展示スペースやイベント時のカフェとして利用されている。今後バーなど夜間の営業も検討している。

4. 日々別荘としての事業開始

1) 建物について

建築は upsetters architects¹²⁾ による。改修・修繕にあたって大幅な工事はしておらず、現状復旧のみ行った。工事着手時点までに、手塚氏が長期間に渡り少しずつ手を入れてきたため、ほぼ使用できる状態で残されていたためである。2階天井のみ雨漏りがひどく天井をやり直しているが、これも2000年代に一度手塚氏が手を入れている。その他の細かい点も継続的に修繕がなされている。日々別荘として利用するための修繕では、雰囲気合わせた古いガラスを入手しての補修などを施している。2020年7月から地域住民も改修に参加しDIY形式で改修工事が進められた。事業費は約500万円¹³⁾で、雨漏りなどへの対応や、建具修復、表塀修復、安全対策、躯体補修などの費用として使用された。

木造2階建て延べ約240㎡で、建物の正面玄関を境に和風建築と洋風建築に分かれ、8室がある。2階は宿泊専用スペースで洋室が2人、和室が4人で利用できる。1階の和室部分は、ふすまを取り払うと最大20人が滞在できる。洋室部分にはキッチンがあり、バーやカフェ、展示スペースとしても利用される。主に1階は地域のコミュニティスペースとして活用している。水回りのユニットバス、水洗トイレは一般住宅用の設備で、宿泊施設の観点ではやや劣るが「多機能コミュニティ施設、まちづくり関連施設に泊まれる」というコンセプトの元に選定している。

2) 2021年時点での利用者

2021年2月から正式に宿泊施設として受付・受け入れを始めたため、利用者はまだ多くないが、1名～1組8名、3世代での宿泊など人数・利用者層ともに幅広い層が利用している。これまでに、地域の漆器屋の紹介による観光目的での滞在や、フリーランスのワーケーション利用での滞在などがある。

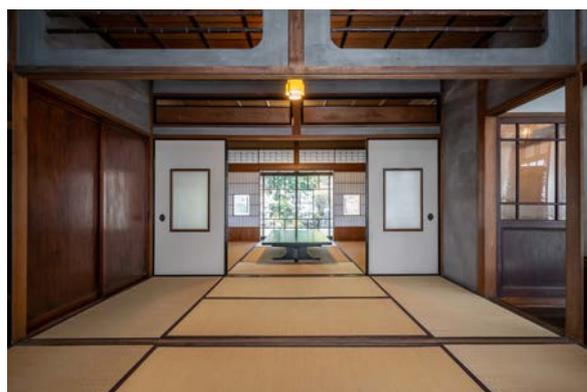
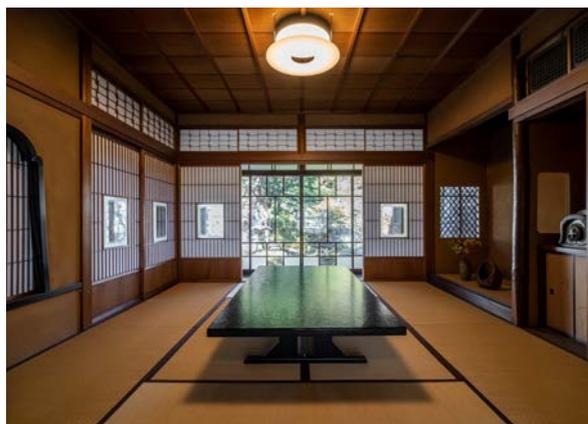


写真9. 1階和室部分

3間続きでイベント時やオープンデーにはサロンとして開放されている。

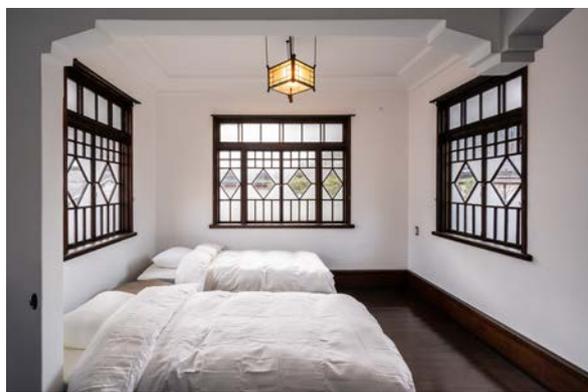


写真10. 2階洋室（宿泊室）

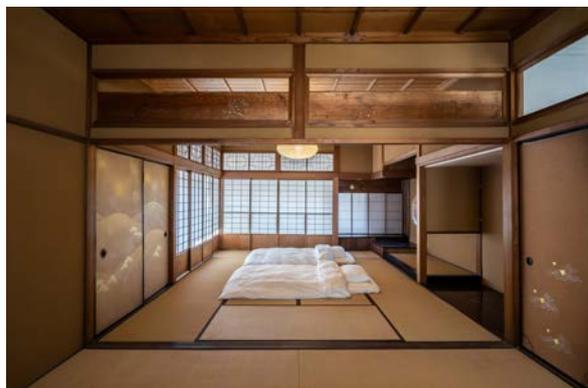


写真11. 2階和室（宿泊室）

3) 宿泊機能付きで運用を始めた理由

宿泊と飲食の機能付加は事業構想初期からの考えであり、また民間のみでの運用は難しいとも考えて、半官半民での運用に向けてプロジェクトを進めてきた。

宿泊機能を付加した理由は、地域住民へのヒアリングで、料理学校の生徒が漆器を学びに来た時に留まる場所がない、小学校の区域外宿泊を受け入れても泊まる場所がないなどの声が複数あったためである。また、これまでに他大学との関わりもいくつかあったが、宿泊拠点がないため、日帰り・短時間の関わりしか持てず、地域に根付き、将来的に継続する取組になりづらい面があった。若い学生に興味を持ってもらう機会の創出・継続的な運用は、その学生の卒業後を含め、長期的な視点で、地域に関わる気概を持つ人の育成につながると考えている。

4) 宿泊の概要

新型コロナウイルスの影響や管理や維持、対応オペレーション上の都合もあり、2021年現在は

1棟貸しで運用されている。費用は避暑地として需要の高い夏季は3万/泊を考えている。長期利用の場合や団体での割引も考えており、将来的には、まちとの接点の場所でもあるため、2～3組/日を受け入れ、かつ近藤氏も日中滞在して地域との接点を補助するような役割を担いたい。

5) 運用について

運営母体の街カンでは、地代、家賃、光熱費を支払っている。会社は株式会社だが、収益を上げることに対するこだわりはない。まずは日々別荘が看板事業になれば良いと考えている。収益が得られればそれは勿論良く、その場合まちづくり関連の事業に還元していく。

6) 飲食機能について

現在、木曾平沢には飲食店が一店舗もない。選択肢はいくつか用意していきたいと考えており、2021年3月現在は以下の3点。

・奈良井宿のお店からケータリング・デリバリーする



写真 12. 改修・補修後のオープン時の外観

- ・奈良井宿と木曾平沢を行き来してもらいたいという考えもあるので、奈良井宿まで食べに行く
- ・人数や金額などの条件があれば、塩尻市からジビエ料理のシェフを呼ぶ

将来的には、街中で機能を分散させて提供したいと考えている。また、「一般財団法人 塩尻・木曾地域地場産業振興センター」が管理・運営する、地場産物など特産品の発信拠点である「木曾くらしの工芸館」や道の駅「道の駅木曾ならかわ¹⁴⁾」の同敷地内にはカフェとレストランがある。これらを活用したいとも考えているが、現在では飲食機能がやや衰退しているため今後力を入れていきたい。

食事の提供方法では、予約や先払い制にすると運用側としては確実性があるが、利用者側としては利用ハードルが上がるので、気楽に一杯飲みたい、食べたいというニーズに対応できるように整備していきたい。

木曾平沢と行き来しての利用を想定している奈良井宿も飲食店の閉店時間が早い(最長ラストオーダー時間が18:00の店が1軒)が、奈良井宿での動きや日々別荘からの需要に応じて夜20時頃までの運用を検討する声も聞かれるようになった。

奈良井宿・木曾平沢両地区では、一般住居として住まう住民も多い街並みのため、建物の特性上、店舗空間と生活空間が近い。また、道が生活空間でもあるので、生活時間との兼ね合いからあまり遅くまでの営業をしない・できない背景もある。開店時間については地元と折り合いをつけながら調整していきたいと考えている。

7) 日々別荘のアピールになるポイント

和洋折衷の建物自体が魅力であり、その価値を楽しんでもらいたい。表に建物が並び、中庭を挟み、奥に蔵を構える各敷地の構成は、魅せる要素である。地形に沿ってできた木造建築群と職人町としての独特な雰囲気が建物に現れている街並みとあわせて歴史ある貴重な建築を楽しんでほしいと考えている。

8) 期待している客層・利用について

事業構想初期の段階では、多機能型コミュニティ施設として成立させる機能として、木曾平沢の漆工町という特徴を活かし、漆器を含めたクラフトやものづくりの視点で考えていた(1章-4)事業当初に構想していた課題解決に向けた方向性)。しかし、ものづくりのみに限定しない、多角的なコンセプトの必要性を感じていた。加えて2020年3月頃からの covid-19 の影響により、二拠点居住やリモートワークの推進による地方移住、ワーケーションなどの活性化という社会的な動向への対応をコンセプトにも取り入れる方向に進み、2020年夏頃より、「たらくさ株式会社¹⁵⁾」(各地域での観光促進やまちづくりにまつわる企画・制作・実施・運用を行う)に依頼し、自然環境のすばらしさや教育面での、地域やこの建物が持つ魅力の活用という視点が入り、当初のものづくり中心での活用というコンセプトから広がりをもつコンセプトへと変化があった。

upsetters architects の建築士もコンセプトづくりに参画している。そこでは、建物の持っている機能を少しずつ地域や利用を考えている人々に分かるよう周知し、使う人たちからの使い方の提案を繰り返しながら、この施設の使い方を固めていくのが良いのではないかと、という意見も得た。現在も試行錯誤を続けている状況。

その中で、今回近藤氏も参画して始動しているのが、宿泊拠点としての利用である。利用者獲得のための営業活動も行っているが、泊まるためには、時間や費用が必要で、大きな理由・動機がないと来ない。観光の一環や7~8人の大人数で泊まれる、という点でのアピールではなく、それよりも深い結びつきが醸成される場として運営していきたい。例えば、ものづくり、漆器関係、区域外就学(国内短期留学)¹⁶⁾、まちづくり繋がり、まちの建築の繋がり、など。そのような人々が塩尻市や木曾平沢地区に興味関心を持ち、地域の課題などに共感された上で、来訪や逗留が成り立つようにしたい。

このような経緯で運用がスタートしており、参

考にした事例などは特にない。

9) 運営上やプロジェクトデザインなどで苦労した点

運営上やプロジェクトデザインで負担に感じている点はほぼない。事業開始当初から藤森氏が参画しており、ヒアリングや空き家の実態調査などで関係づくりがなされているため、地域に対してこまめな情報提供ができた。木曾平沢の中で新しいことがらを始めるにあたり、地元からの大きな反対がない点は動きやすいと感じている。

運用開始後の、古い建物の保全には苦労している。運用開始前に利用頻度や人数が少ない状態では問題にならなかった部分だが、使用し始め、利用者が増えると、傷みやほころぶスピードが速い。補修に継続的にお金がかかる。例としては、雨漏りが目下最大の課題。2021年4月以降の工事で外壁補修工事を予定。

10) 建物で補修や改善を控えている部分や課題点

冬季に冷え込みが厳しいため、建具の断熱と床下の断熱が必要。2021年には省エネ診断士やDIYの専門家を呼び、地域・地域外の方と4回程度のワークショップを通して自分たちでできる範囲の工事を実施する予定。このワークショップを起点に地元の人を巻き込み、古い建物も自分たちで、DIYで改修や使える姿にできるということを地域内に普及させたい。大きな補修部分は玄関のクラックや雨漏りの補修だが、予算の関係で先送りになる予定。

収納は、現在、奥の和室の内装が未補修のため、ストックルームとして活用している。補修後は宿泊室や居室として使用するため、宿泊用の布団などの収納場所を確保する必要がある。蔵はまだ手を付けていない。

現在、宿泊室は2階和室だが、高齢の方が泊まりに来た際には回り階段が急なため、1階を宿泊室としたいが、どの部屋を宿泊室として提供するかを悩んでいる。

11) コミュニティ施設としての運営

週1回または2週に1回、オープンデーとして、10～15時にコーヒー店、菓子店、食べ物関連の店を招致し、開催している。オープンする日は複数設定し、参加機会が増えるように意識している。

地域の中でも、日々別荘が何をしているかわからない、地区に50年ほど住んでいるが入ったことがない人はかなり多い。オープンデーはこれら地元・近隣の住民に対するアプローチ活動である。オープンデーには誰でも内部を見学でき、中を知ってもらい誰かに話せる、周知できるようにするための環境を作り、提供している。1階和室は、サロンとして開放しており、地元・近隣の高齢者が1時間ほど話して帰宅するなど、交流の場である。

12) 今後目指している姿、想定している使い方・使われ方

日々別荘を起点にまちの活気づいている様子や人が活動のため出入りしている様子を街中に浸透させたい。このような活気のまちへのあふれ出しは、地域外から来た人への移住需要への訴求にもなると考えている。

内（建物内）と外（地域）が交わる拠点として活用して行く予定。地域の実態として、地域の中で出かける場所がない、若い人は外に出て行くなど、車に乗らなくなった高齢者の方がずっと家に居る状態である。それらの人々にとってのコミュニティの場や、地域外から来た人たちの地域との接点の場としての使い方を、宿泊にとらわれず自由に実施していきたい。これらを今年1年の目標としている。また、ワーケーションや短期教育留学などのニーズにも応えられる運用を目指している。

13) 観光のプログラムやまちをひらく活動について

漆工町として町内で漆器制作を営む職人に漆器加工や制作の場の見学を申し入れている。一方で、職人自身が知るまちの紹介者が介在すれば受け入れてもらいやすい。現在は、開いている店、仲介

がなくとも見学の受け入れが可能な拠点などをまとめたマップの制作を進めている。

連携は、町内の大きな3団体を対象に交渉を進めている。

- ・木曾漆器工業協同組合¹⁷⁾
- ・木曾漆器工業協同組合青年部¹⁸⁾
- ・木曾平沢町並み保存会¹⁹⁾

上記各団体に、近藤氏が個人的にアプローチし、観光のための活動を提案、また、職人さんに個別でアポイントをとり、まちをひらく活動について人づてに話を広げている。

14) 観光を含めた地域外への人の受け入れに対する地域の整備

これまでは、業者の人は会社前に停める、バックパッカー（電車で歩いてくる）、車の人は地場産センターで漆器を買って帰るなど、町内に車で訪れる来訪者が少なかったため、問題は表面化しなかったが、近年、町内に滞在する利用者・来訪者が増加しつつあるため駐車場不足が課題となっている。街並み保存会に依頼し、漆器組合のもつ土地に、止められるよう整備を行った。

木曾平沢は地域内すべての建造物が重伝建に登録されているため、腐朽した古い建物を壊して別の用途に転用するなどの整備は進めづらい。また、地域外の人々の町内への誘導や、滞在してもらうための環境整備の必要性を感じられなかった、また、地域内で長く暮らす人々は地域外からの来訪者が抱える課題に思い至らないこともあり、対応が遅くなっている。

15) 木曾平沢・日々別荘の活動の他地域への影響

近隣地域を代表するモデルケースとして重要な事業である。奈良井宿にも大きな動きがあり、木曾平沢も大きく動くと、ひとつ北の宿である費川にも影響し、旧檜川地区全体の活性化につながると考えているため、ここ数年で旧檜川地区全体の活性化を目指したい。

地形に沿ってできた建築群が長く残っているのは貴重で、地区の財産として残していきたい。ま

ちは経済的活動がないと残らない。住むだけではなく、「住みたい」と思わせる必要がある。

木曾平沢のような、職人の集まる街は、ほかにはない。木曾漆器の振興に寄った視点だが、職人町としての独特な雰囲気が建物に表れている。漆器が様々な背景のもと衰退している面もあるが、異なるものづくりの分野（芸術的・クラフト・手仕事の部分）が入り、漆器とうまく組み合わせり漆器文化が残っていけばよいと考えている。手仕事をやるならここだ、というブランド戦略にしたいが、手仕事やものづくりのみで経済を成立させることは難しいため、多角的に様々な取り組みを同時並行で実施していきたい。

参考文献

- 1) 木曾平沢町並み建築てくてくマップ, https://tokimeguri.jp/wp/wp-content/uploads/2018/03/teku2_.pdf, 2021.4.21 参照
- 2) 木曾路はすべて山の中 ～山を守り 山に生きる～, 中の構成文化財 > から 02 塩尻市木曾平沢, <http://www.kisojisan.com/heritage/02.html>, 2021.4.21 参照
- 3) 塩尻市, 広報しおじり, <http://www.city.shiojiri.lg.jp/gyosei/koho/kohoshiojiri/index.html>, 2021.4.17 参照
- 4) 広報しおじり, 平成 29 年 10 月号, <https://machihiro.town/p/26905#book/1>, 2021.4.17
- 5) 日本仕事百貨, ちいさな共同体をあそび倒す, <https://shigoto100.com/2020/02/shiojiri-4.html>, 2021.4.17 参照
- 6) 株式会社しおじり街元気カンパニー, <https://shiojirigenki.com/>, 2021.4.17 参照
- 7) 木曾平沢ふるもの市, <https://anochi-konochi.jp/2018/11/07/furumonoichi/>, 2021.4.24 参照
- 8) シブヤ大学, <https://www.shibuya-univ.net/>, 2021.4.24 参照
- 9) シブヤ大学, 先生紹介, <https://www.shibuya-univ.net/ professor/detail/1003/>, 2021.4.30 参照
- 10) 一般財団法人塩尻市振興公社, <http://kousha.shiojiri.com/>, 2021.4.24 参照
- 11) 塩尻市ホームページ, 土地開発公社, <https://www.city.shiojiri.lg.jp/gyosei/machizukuri/tochikaihatsukosha/index.html>, 2021.4.24 参照
- 12) upsetters architects, <http://upsetters.jp/>, 2021.4.24 参照
- 13) 市民タイムス WEB, 塩尻市木曾平沢に宿泊対応交流施設 旧別荘を改修 「日々別荘」2月開業, 2021/1/14 記事, <https://www.shimintimes.co.jp/news/2021/01/post-12350.php>, 2021.4.24 参照
- 14) 道の駅木曾ならかわ, <https://www.kiso.or.jp/>, 2021.4.24 参照
- 15) 株式会社たらくさ, <https://tarakusa.co.jp/projects>, 2021.4.24 参照
- 16) 塩尻市 H P, 小規模校への区域外就学, <https://www.city.shiojiri.lg.jp/kosodate/gakko/kokunaitankiryugaku.html>

- 17) 木曾漆器工業協同組合, <http://kiso.shikkikumiai.com/main.html>, 2021.4.24 参照
- 17) 木曾漆器工業協同組合青年部, <http://kiso.shikkikumiai.com/seinenbu/>, 2021.4.24 参照
- 18) 木曾平沢町並み保存会, <https://www.kiso-hirasawa.com/>, 2021.4.24 参照

5. 日々別荘平面図と各所の写真

近藤氏より提供いただいた、『木曾平沢 手塚家別荘「多機能型コミュニティ施設改修・運営事業」位置図・見取り図・設計図』に掲載された設計図（補修・改修の部分などが示されている）に対し、見学時に撮影した写真および近藤氏より提供いただいた写真を各室の空間や外構の補足情報として次ページから示す。

1階平面図

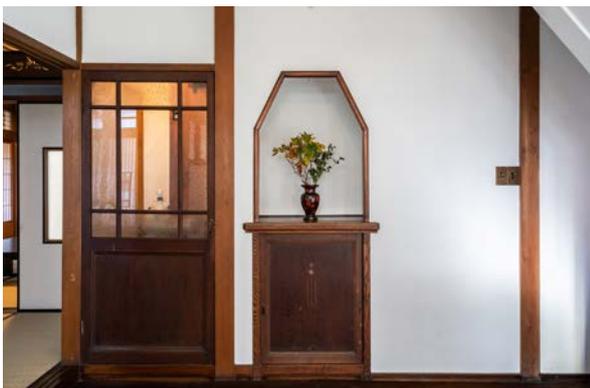
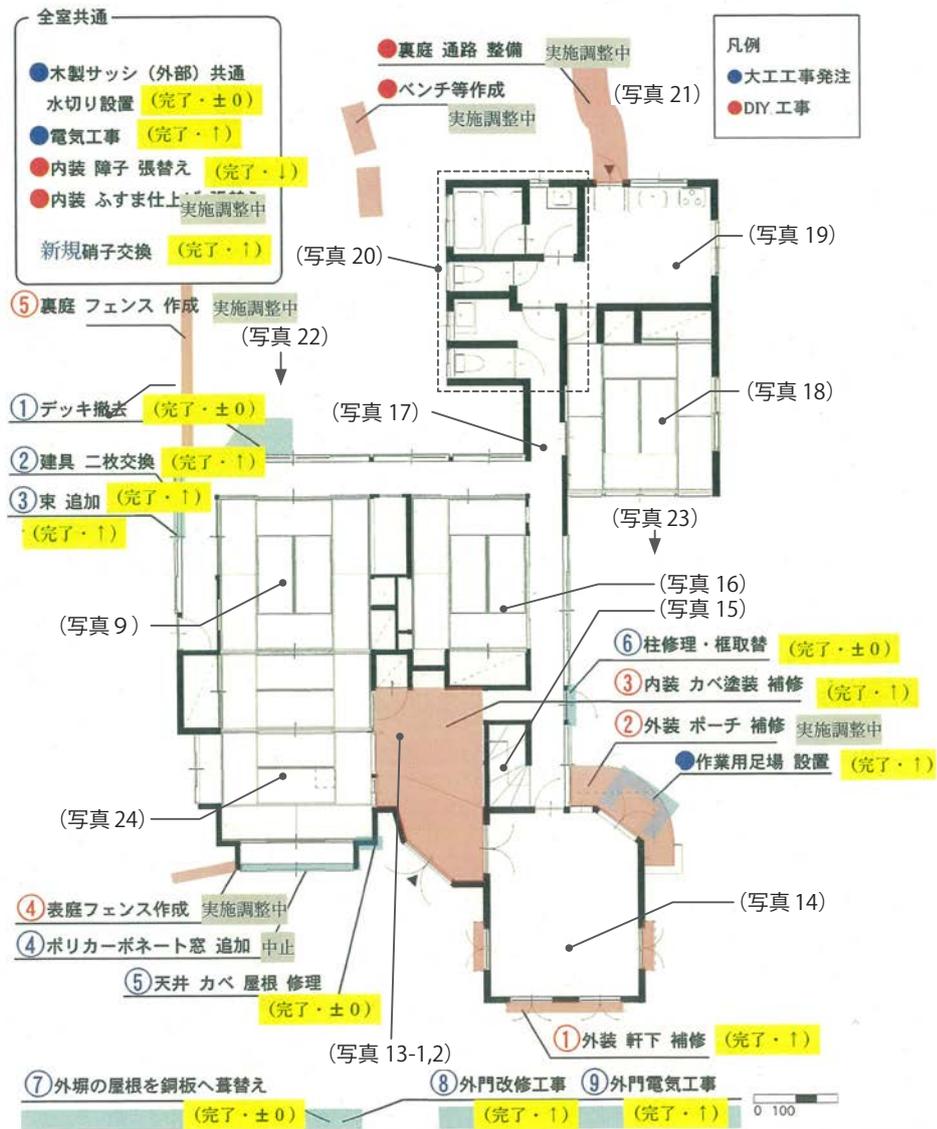


写真 13-1. 1階玄関部分
左側の小さな個室は電話室として利用されていた

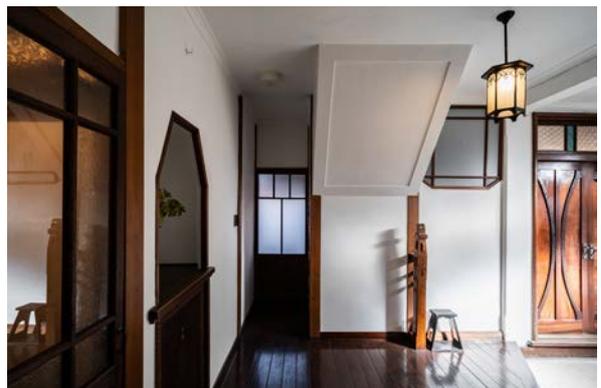


写真 13-2. 1階玄関部分
右端の扉が1階洋間展示スペースへの入り口。



写真 14. 1階洋室（イベントスペース、カフェなどで利用）
 右側の上部に青いステンドグラスのある扉は外庭からアクセスできるため、宿泊エリアと区切った運用が可能である。



写真 17. 1階廊下（洋風建築部分と和風建築部分の境界）
 1階の洋風建築部分の廊下から臨んだ和風建築部分との境界の様子。1階奥のキッチンや水回りのある洋風建築部分の内装はログハウス風に設えられている。



写真 15. 2階への階段



写真 18. 1階洋風建築部分の和室から街道側の庭を臨む
 キッチンに隣接する和室。街道との間には外塀があるため視線は遮られている。景観がよく、日当たりも良い部屋である。



写真 16. 1階和室
 現在はストック場所として利用している。今後、壁や天井などの補修を実施予定。



写真 19. キッチン
 冷蔵庫・システムキッチン・電子レンジ・トースターなど長期滞在にも対応可能な什器が揃っている。左側扉は勝手口であり、裏庭に続いている。



写真 20. 1階水回り（左から風呂，脱衣所，トイレ，洗面所）

ログハウス風の内装で統一されたあたたかみのある内装である。冬季は冷え込みが厳しいため、各場所にはパネルヒーターが設置されており、冬季も暖かく過ごせる。



写真 21. 裏庭

枯山水の庭として設けられていた。今後は通路を整備予定。



写真 23. 街道側の庭からの眺め

1階洋室（写真右側扉が出入口）で開催されるカフェなどにアクセスしやすいよう、外扉は開閉できる。



写真 22. 裏庭から和風建築部分を臨む



写真 24. 1階サロン部分和室

見学時はテーブルと椅子が設けられていた。右奥には絵本が置かれており、多世代が過ごす場所として環境が整えられていた。

2階平面図

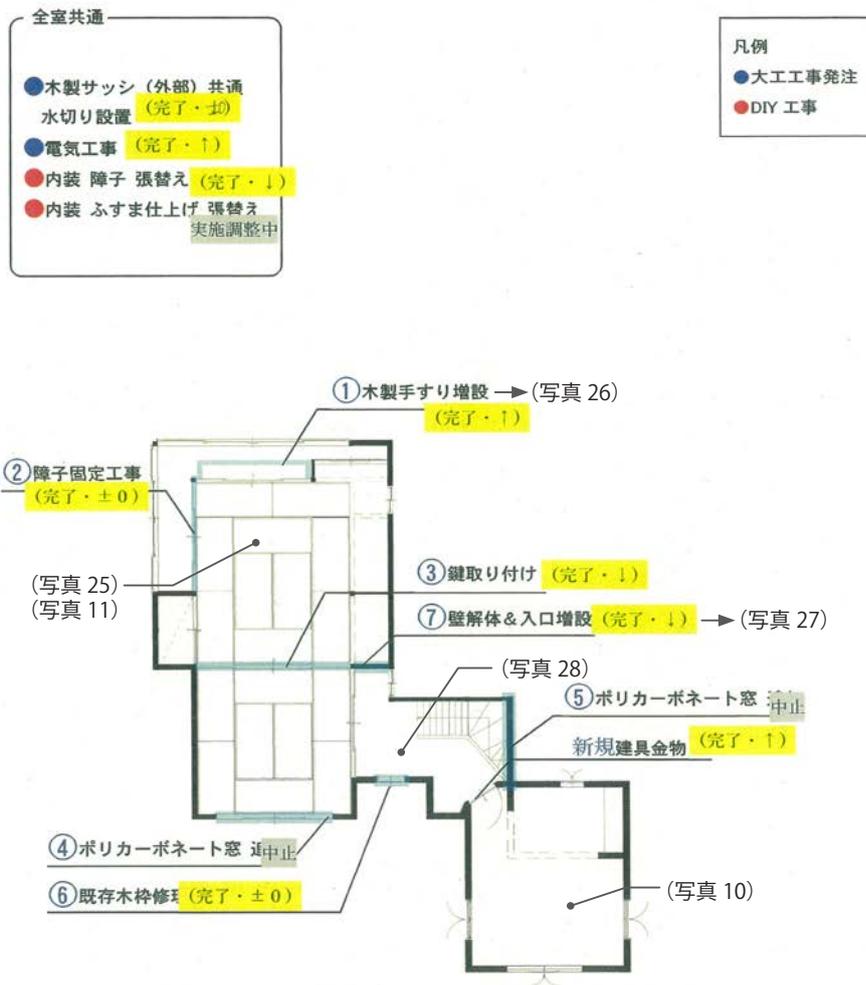


写真 25. 2階和室 (宿泊室)



写真 26. 2階に増設された手すり部分

2階部分は、窓に寄りかかるなどしたときに転落の危険性があるため、柵が新設されている。

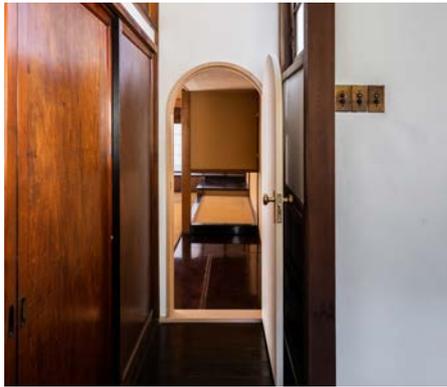


写真 27. 2階裏庭側和室への専用扉

ワーケーションなどで複数組を受け入れる場合に裏庭側の和室と街道側の和室を別々で使えるよう、裏庭側の和室にのみアクセスできるよう、専用の扉を新設している。



写真 30. 2階裏庭側和室からの眺望

裏庭を臨んだ様子。樹木から左側は隣家の蔵部分であり、庭には明確な境界線や塀などがなく、隣家とゆるやかなつながりが持たれていたこれまでの歴史が伺える。日々別荘の蔵は右奥の灰色の壁の建物で、今後整備して活用する予定。

(以上、作成者：東京電機大学 村川真紀,
2021.4.23)



写真 28. 2階共用部

幾何学模様の窓枠は洋風建築部分の随所に設けられている。



写真 29. 2階洋室の窓